

愛知教育大 日下部 信 幸

目的. 小学校家庭科及び中学校技術・家庭科では、主に市販の素材(布)を加工する方法で生活に必要な技能・技術を習得させているために加工(製作)技術に重点が置かれ、材料のなりたちを理解しないまま学習が行われていることが多いと思われる。児童・生徒が材料のなりたちを学習した上で技能・技術の習得と作品づくりが行われるならば、一層主体的な学習になると考えられる。そこで、被服の素材である布について、そのなりたちの過程から作品づくりまでの一貫性のある教材を検討する。ここでは、最も身近な綿をとりあげ、綿を栽培し、糸を紡ぎ、織り、染め、作品を仕上げるまでの過程の中で、昔の道具を理解し、それを工夫して道具をつくり、糸や布のなりたちを知り、児童・生徒の個性に合った作品をつくる教材を考えてみる。

方法. ①綿の栽培(畑の準備、種まき、除草、採取)、②糸を紡ぐ準備(綿繰り、打綿、篩)、③糸を紡ぐ(手摺り、紡錘車、糸車、子供用自転車のリムや工作用モータの利用)、④糸を蒸す、染める、⑤織る準備(罫に巻く、尺と糸、よこ糸)、⑥織る(ボール紙、空箱、木枠)、⑦染める(紅茶、玉ねぎやブドウの皮、ドングリなどや昔からの染料草花や樹木、助剤の工夫)、⑧作品にする(花びん敷き、小銭入れ、ポシエット、テーブルセンター、壁かけなど)、⑨その他(端や房の始末、しゅう、スナップつけ、作品発表)。

結果. ①～④の学習の過程で、材料のなりたちや道具の意義が理解され、物の大切さ、労働の喜びしさ、作る喜びなど、児童・生徒の主体的な体験的学習が行える教材となる。

付記. 本報は安藤、生田、岡田、拓植による昭和56年度愛知教育大学家政学教室卒業論文をまとめたものである。